

一、仙台支部誕生までの経緯 (昭和二三年～昭和三三年)

宮城県に初めて法の種が蒔かれたのは昭和二三年仙台市の鈴木八千代さんでした。その後、角田、岩沼、桃生と続き、下馬、白石、岩切、大代、丸森名取、七ヶ浜、中新田、栗駒の各地域に広まっていきました。この頃の教団組織は導きの親子関係を主軸とした縦系となっており、在京の支部は第一支部というように数字支部になっていました。昭和三三年頃には仙台地区に二十を越す数字支部系統の会員がおりました。

【仙台教会】

昭和二三年 (一九四八年)

六月 鈴木八千代 入会 (六二支部)

【教団】

八月十一日 宗教法人令により

宗教法人立正交成会となる

【社会の動き】

新制高校発足

七月二十九日 斉藤米吉 入会 (仙台市 三八支部)

十一月 笹森優恵 入会 (角田町 十九支部) 導き親 松木恵津子

昭和二四年

八月二八日 青年部発足

昭和二六年

十月十七日 新宗連発足 本会加盟

昭和二七年

四月

松木教雄 入会（河南町 九支部）導き親 及川育子

六月十四日 長沼基之初代理事長就任

ラジオ「君の名は」開始

昭和二七年入会の松木さんは家業の農業を妻や姑にまかせ東京の本部まで行き信仰を深めました。松木さんは在京幹部の間で「宮城県で一所懸命に信仰している人」と噂になり、時として第九支部以外の総戒名の祀り込みを依頼されるほどでした。そして、在京幹部さんのご指導に従って宮城県内をオートバイでくまなく走り回り、他の支部の和地さん、谷村さんや山崎さん、志賀野さんと交流を持つようになりました。

昭和二三年入会の笹森優恵さんのご息子克典さんの回想

「教会発足五十周年を迎え、一昨年亡くなった母の信仰生活が思い出されました。

母は昭和二十三年東京・渋谷の親戚の人に導かれ十九支部に所属しました。当時は導

きの親子関係で、導きをすると東京へ行き幹部さんが来てお祀り込みをします。幹部さんが帰る時は又新しい導きをさせて頂き東京に行く。その繰り返しで本部通いが続く生活の苦しい我家では汽車賃を捻出するのも大変でした。母は佼成会の教えを実践すれば幸せになれると信じきっていました。仙台に道場ができると毎日のように通っては布教に歩きました。現在のように車もなく交通の便も悪くバスと歩きだけです。

地元角田をはじめ白石・亘理・丸森と会員さんの手取りで下駄はすぐにすり減り、買う余裕などなかったそうです。父も一ヶ月程本部で修行すると母と一緒に手取り導きと歩き、法座や宿直当番にも進んで参加し、幸せな家庭を築くことができました。母は以前にも増してまず人さまと困っている人がいると「ありがたい、ありがたい」と昼夜を問わずとんで行きます。始めは、佼成会に反対していた私でしたが、母の後姿を通して青年部活動に参加するようになり青年部支部部長のお役を頂き、母と同じように毎日手取りに歩き、部員さんの喜びや幸せが自分の喜びや幸せと感ずる事ができました。母もそんな思いで只ひたすら菩薩行を実践されたのだと思います。」

角田支部 堀米 身知子さんの体験

「昭和二十三年、西根の地に東京から来て立正佼成会の法の種が蒔かれました。戦争中の生活なので皆様も大変でした。そんな時に心のよりどころとして、皆様も何か求めていたと思います。皆様も一生懸命に信仰にすがっておりました。お互いに振り返ってみれば色々ありました。その当時、私の家では次から次へと病気のどん底の生活でした。」

その時、佼成会のお導きを頂きました。

昔、東京の本部に汽車で行きました。その時、自分の悩みや苦しみをを本部に行つて教えて頂き、家に帰つて来て教えて頂いた事を一つ一つ実行させて頂きました。現在では、昔のような暗い生活から明るい生活に変わらせて頂きました。昨年は、ご法号の勸請を頂きました。自灯明・法灯明を胸にひめて毎日のご供養をさせて頂いています。

より一層精進し、自分の見方考え方を仏さまの教えに照し合せて、生活に生かし教えを実行して行きたいと思ひます。」

昭和二八年

七月

阿部恭子 入会（渡波町 五十七支部）導き親 落合教雄

紅白歌合戦放映開始

昭和二九年

山崎俊男 入会（仙台市 茨城支部）導き親 杉田サト

「第五福竜丸」被爆

五月

谷村典孝 入会（仙台市 三十三支部）導き親 久水康江

昭和三十年

十一月

和地淑恵 入会（仙台市 四十九支部）導き親 石垣某

TBSがテレビ局を開局

昭和三十一年

一月七日

第五十六支部が誕生し勢力的支部の布教が
県内に統合的な形として現われ始めます

日本の国連加盟可決

「もはや戦後ではない」

志賀野充代 入会（仙台市 茨城支部）導き親 鈴木秀太郎
若杉よしえ 入会（仙台市 茨城支部）導き親 鈴木秀太郎

昭和三十一年

法座所に伊藤文吉宅借用

世界初の人工衛星成功

三月二四日

本部布教班を招き大会開催 味噌醤油会館 四百名参集
（原口昌子第九支部長 石塚益弘第二支部幹部）

宮城県内の会員が連帯感を強めたのが本部布教班による布教でした。昭和三十一年の第一回布教に訪れた原口昌子第九支部長は次のように本部への布教報告を行っています。「この地区は連絡所ではありません。しかも今回が初布教です。法座所は第三三支部の伊藤文吉氏宅を使用させて頂きましたが、信者は非常に求めておりまして、所属会員二一八名に対して他支部の方もかけつけまして四百名という好集合でありました。この地区には試みの布教でありましたが、信者は非常に喜びまして、この布教を異状の感激をもって迎えておりました」

昭和三十三年

九月十日 妙佼先生が遷化（六七歳）

本部布教班は昭和三十三年の仙台準連絡所発足に至るまで度々仙台を訪れました。そして在京の数字支部系統の幹部さんは連絡所発足に必要な五百世帯を達成するために互いに競って仙台市やその周辺を訪れて、自らの系統の教勢の拡大に努めました。

宮城県における教勢は、こうして昭和三十三年の一、五四一世帯が三十三年には二、四一三世帯に増加しました。教勢の増加に伴い宮城県内でもようやく和地章雄さん、谷村典孝さん、松木教雄さん、志賀野充代さんなどに曼荼羅が本部によって勧請され、宮城県における佼成会の幹部へと成長していきました。

三月 秋葉身知子 入会（石巻市 四十五支部） 導き親 三上ふみ

六月 仙台地区布教大会開催 一月 教団創立20周年

（仙台市公会堂 千五百人参集）

『真実顕現の時代』

一万円札発行
東京タワー完成

宮城県内の連絡所発足にむけての努力は、宮城県の幹部の活躍により一層の連帯感を強めることになりました。昭和三十三年に仙台市公会堂で行われた仙台地区布教大会には二十支部、千五百人の会員が参集して互いの存在を確かめ合い結束をかためました。

指導にあたった石井君枝第二支部長は、宮城県の会員について「支部単位の狭い気持ち」を捨てて、連絡所中心になって和になって精進していけば、将来発展する見込みがある」と本部に報告しています。

六月二十日

仙台準連絡所発足（主任 和地章雄）

遠藤正之助宅の二階を借用

大会の興奮さめやらぬ同年六月二十日に仙台準連絡所が発足し、主任には和地章雄さんが就任しました。和地さんは家業の旅館業を妻にまかせ、仙台周辺に住む三十以上の支部系統会員のリーダーの役割を果たすこととなります。

七月二十日

仙台準連絡所に大曼茶羅鎮座式挙行

【昭和三十三年 仙台準連絡所大曼荼羅鎮座式】



スーツの男性は和地主任さん

【仙台準連絡所大曼荼羅鎮座式】



現在（平成二年）の連絡所外観

【仙台準連絡所時代の修行の様子（昭和三三年頃）】

仙台道場建設に釜石・石巻の東北教会の会員

さんも駆けつけました。前列左の男性は釜石

支部及川会計さん。（後の第三代仙台支部長）



連絡所の庭にむしろをひいて修行しました



右から鈴木豊、秋山、半沢、

志賀野部長、灰島





【仙台準連絡所時代の修行の様子（昭和三三年頃）】

後列左から志賀野、安田、阿部、二人おき山寺、秋山

前列左から野崎さん子供、秋山、畑、一人おき大場、森、和田、菊地



後列左から安田さん谷村さん前山さん

前列升沢さん伊藤さん



後列左から阿部さん谷村さん

前列升沢さん前山さん



【昭和三十年代の仙台駅】
四代目の駅舎（現在（平成二年）は五代目）は五代目



【昭和三十年代の一番町】
中央を車が走っていました



【昭和三十年代の仙台七夕】